

「追いつけろ、私！」

岡山県 佐藤亜佑美

真っ白な練習着を着て帽子をかぶる。帽子をかぶると私の「女子」のモードはオフに切りかわるのだ。そして眩しく照り返されたグラウンドに向かう。

私は野球部員。マネージャー？と、よく言われる。私にとって野球を見ているだけなんか体がウズウズしてしまう。そう、私は球児と一緒に打って、守って、ドロドロになってプレーしてきた。

グラウンドに整列する。うわっ、また背が伸びた？ 男子と整列する度、私はうらやましく思う。

「脱帽、気をつけ。礼っ」

「おねがいしますっ」

練習メニューももちろん同じ。男子の中でやっていると、自分の技術が劣っていることは痛い程分かってしまう。それに小学生の時は男子よりも走っていたのにどんどん抜かれた。負けず嫌いな私には正直悔しいこと。冬期の持久力をつける為の練習では男子についていくのに必死だった。そんな時は弱い自分との葛藤がある。もうリタイアしようか。でもここでやめたら負けだと言ひ聞かせる。女子だからと妥協したくない自分がどこかでいたのだと思う。それに何より私は野球が好きだったからかな。

そしてこの夏。一心不乱にボールを追う自分がある。太陽は容赦ない日差しを向け、汗は拭っても拭っても流れるばかり。でも太陽になんか負けてられない。このチームでプレーする最後の夏だから。うちの気持ちは太陽なんかよりも熱いで。さあこい。とにかく夢中で土を行き交う球を全力で追う。決して上手くなくても泥々になって全力プレーをする。そう、それが私の野球だと暑い熱い日々は私に教えてくれ、野球部員としての夏は終わった。そして今まで自分を「仲間」としてくれたチームメイト、先生、いつも支えてくれた両親へ恩返しをするため、また白球のように輝く「夢」を追いつける。